

「あなた」に届け！ 日本大学生訪中団 レポート

お金がない？ だが諦めるのはまだ早い！

止まらない物価高、上がらない給料、先の見えない円安……大学生を悩ませるお金の問題はなんと尽きないことだろうか。普段の生活を営むのもままならないのに海外旅行なんてもってのほか、ましてや留学なんて……と海外進出を諦めているそこのあなた！ なんと渡航費も滞在費も負担しなくていい、夢のような海外派遣プログラムがあるんです！ 今回はそんな海外派遣プログラム「日本大学生訪中団」を紹介するとともに、2025年第1陣に参加した編集部員が実際の様子をレポートしていきます。（J）

日本大学生訪中団とは？

外務省が推進する対日理解促進交流プログラム「JENESYS」の一環として、公益財団法人 日中友好会館が実施する海外派遣プログラム。2025年第1陣は、5月24日（土）～5月30日（金）の6泊7日でおこなわれ、「中国とのふれあい」をテーマに91名の日本人大学生・大学院生が上海市、江西省、北京市を訪れた。

本プログラムの魅力はなんといっても、**渡航費・滞在費の参加者負担が0**であること。（2025年第1陣に限る。今後変更される可能性は十分にあるため公式情報を必ず確認してほしい。）費用負担は基本的に、中国側招へい機関である中国日本友好協会が担ってくれるため、お財布に優しいのが嬉しいところだ。

プログラム内容は後に紹介するように、日中大学生交流イベントへの参加や、中国の大学訪問・交流、一般人は入れないような施設・機関の視察などがあり、**観光旅行では経験できないような体験**がたくさんできるのもポイント。大学生という身分を生かして、一生モノの経験を手に入れてはいかがだろうか。

▼日中友好会館HP



▼2025年第1陣の様子



はみだし
すてーじ

5月が暑すぎて夏本番の暑さが不安です……

⇒京都の夏を舐めてはいけません。エアコンは使えるかちゃんと確認しましたか？

第2陣参加のススメ

本団は通常毎年2回実施されており、今年も2025年第2陣が実施される可能性が高い。筆者が参加した第1陣は3月中旬に日中友好会館HPにて募集が始まり、4月と5月にオンラインでの事前オリエンテーションが1回ずつ開催された。また、2024年第2陣（11月下旬派遣）は8月上旬頃に募集が開始したようだ。応募数が定員数に達し次第募集が締め切られるため、興味がある人はこまめに日中友好会館HPをチェックすることを推奨する。

なお本団以外にも、「JENESYS」の一環として日本の大学生を海外派遣するプログラムは多数存在する。例えば韓国やASEAN、豪州など、派遣先の国は多岐にわたるのも嬉しいところ。派遣機関はJICEやJTBなど様々に分かれるため、更なる情報が欲しい人は「JENESYS」で検索してみよう。

（文・1 アイスはチョコ派）
（チョコアイスよりもあ・な・た；編）

上海

今回の訪中は上海市にある上海浦東空港から始まる。現地時間の18時頃に空港に着いた私たちはそのまま夕食会場に向かい、中国によくあるターンテーブル式の食卓で夕飯を囲んだ。ちなみに、滞在中の食事はホテルで出るもの以外全てこの方式で、いずれの場でもものすごい量の食事が出された。聞いたところによると、中国では客人をもてなす際、量が多くなるように提供するのがマナーで、それを食べきってしまうのは逆に失礼にあたるそうだ。

2日目は上海博物館を訪れ、午後は江西省南昌市へと向かった。上海博物館はとても大きく今回は見終わらなかったが、特に歴史系の展示物が豊富で、限られた時間ながらも満喫することができた。上海を訪れることがあればぜひおすすめしたい。



▲上海の外灘（バンド）から見える美しい夜景。実物は圧巻である

北京

言わずと知れた中国の首都北京。最後の2日間はここ北京を訪れ、永定門や故宮博物館を見学したほか、北京師範大学を訪問し、現地の学生との交流や文化交流がおこなわれた。また、29日に中国人民大学で開催された中日青年友好交流大会にも出席した。この大会では日中の大学生500人が一堂に集い、「以心相交 共筑和平（心をつないで、共に平和へ）」をテーマとして、お互いにパフォーマンスの披露や交流をおこなった。現駐中国日本大使の方なども出席しており、日中友好の礎として我々大学生に大きな期待がかけられていることを肌で感じた。



▲北京師範大学にて。中国の大学は日本とは比べ物にならないくらい全てが大きい

はみだし
すてーじ

今日はもう1つ懸賞に応募しました。1等はNintendo Switch“1”だそうです。⇒Switch“2”に当選した私があなたの分まで楽しんであげましょう^^

江西

2日目から5日目にかけては江西省にある南昌市と景德镇市を訪れた。南昌は江西省の政治・経済の中心地であり、香川県高松市と友好都市協定を結んでいる。南昌では、唐代に建てられた著名な楼閣である滕王閣^{とうおうかく}、最先端のVRアクティビティを体験できる南昌VR産業基地を見学。また南昌大学を訪問し、現地大学生との交流や文化体験がおこなわれた。

世界史を学んだ人ならば一度は耳にしたことがあるだろう景德镇市は、陶磁器の生産で有名な都市で、佐賀県有田町や愛知県瀬戸市と友好都市協定を結んでいる。景德镇では、陶磁器生産関連施設をいくつか回ったほか、寒溪村にて農村振興見学をおこなった。また、陶磁器の絵付け体験をおこない、ここで作成した陶磁器は日本に持ち帰ることができた。



▲陶磁器絵付け体験にて筆者が作成。お皿の鳥獣戯画は我ながら中々の出来

訪中を終えて

——自分の足で訪れ、自分の目で確かめるということ

正直中国にあまり良いイメージがない、という人は少なくないだろう。かくいう私も完全に好印象だったわけではなく、訪中を終えた今でも複雑な感情を拭いきれてはいない。しかし、今回実際に中国を訪れた私が伝えたいのは、実情を何も見ないで判断してしまうのは少しもったいない、ということだ。現地で交流した中国の人々は皆、笑顔で我々を出迎えてくれた。私が出会ったとある中国の大学生は、日本語も英語も分からないながらもお互いに翻訳アプリでコミュニケーションをとり、キャンパス内を案内しながら飲み物をご馳走してくれた。この記事を書いている今も、彼女とはメッセージアプリを通じて交流が続いている。もちろん私が見た世界も数ある一面に過ぎないのは重々承知だ。しかし、せっかくの機会ならば、その目で確かめるのも悪くないのではないだろうか。



▲中日青年友好交流大会の様子。日本からは、我々含め計3つの訪中団が出席

（理・院 おーびす）
（調子に乗ってすみませんでした；編）